

基礎生物学研究所十周年にあたって

植 木 浩

(文部省学術国際局長)

基礎生物学研究所が、岡崎の地に昭和52年に誕生してから十周年を迎えるにあたり、その創設の一端を担当したものとして、感無量の思いがあります。

正確に記憶しているかどうかは、必らずしもわかりませんが基礎生物学研究所の設立の構想については、次のような経緯があったと思います。昭和48年10月に学術審議会から分子科学研究所、生理学研究所とともに基礎生物学研究所を緊急に設立することが適当である旨の報告があり、文部省では、それぞれの研究所の創設構想の進行状況等を勘案のうえ、分子学研究所については、昭和49年度に創設準備、昭和50年度に創設することとしました。また、基礎生物学及生理学の研究所については、昭和50年度に調査費を要求することとしたのであります。

これらの3つの研究所は、いずれも愛知教育大学岡崎分校跡地にいわば研究所群あるいは、研究所団地として設置する構想であったため、昭和49年に行われた分子科学研究所の創設準備に際しても、その創設準備会議の委員に、基礎生物学、生理学の研究所構想関係の推進研究者も加わっていたとき、土地の使用、施設の共同利用等について、三研究所間の関連性に配慮した検討を行うとともに、建物の基本設計等についてもこれらの点について配慮した検討を行うようお願いしました。

文部省としては、三研究所を同一地に設置するということで、新しい試みができるような様々な観点から各委員に御検討を願っていましたが、昭和50年度の分子科学研究所の設置の予算要求に際し、財政当局から、これら三つの研究所の構想について、これを一つの総合研究所として統合して設置することについて検討できないかとの打診がありました。これに応じ、文部省においても、施設設備の共同利用、事務処理の一体的処理等を含め、複数の研究所を構成単位とする総合研究所の設置の可能性とその問題点について、それぞれの研究所の推進研究者の意見を聴取しながら検討を行うこととなったのであります。

提起された主な問題点としては、(1) 研究目的、研究内容を異にする三研究所を総合研究所として統合する構想は、まったく新たな試みであり、十分な時間と慎重な検討が必要、(2) 研究内容、研究者の母体、研究所の運営方針の違い等から、仮に総合研究所として設置するとしても、運営、予算、人事等の面で、相当程度の独自性を持たせる必要のあること、(3) 総合化という観点からは、基礎生物学、生理学の研究所は、生物科学という面から関連する点も多いが、これらと分子科学研究所とは、研究及び運営の面で関連性が少ないこと、さらに (4) 仮に総合研究所とならない場合においても、三研究所で共通に使用できる電子計算機センター、図書館、管理棟、研究集会施設等の各種施設については、一体的に運用することが必要なこと等でありました。

文部省では、これらの意見も参考に種々検討の結果、その創設準備がととのっている分子研を昭和50年度にまず創設し、基礎生物学、生理学の研究所については、できれば、これを統合する方向で検討することとし、昭和50年度の予算要求において「生物系基礎研究所（仮称）調査費」を要求しましたが、政府予算では「岡崎基礎総合研究所（仮称）調査費」となり、三研究所からなる総合研究所の設置について調査を行うこととなりました。

私は、当時、研究機関課長（昭和49年6月～昭和52年2月）として、これらの創設活動に関わってきました。文部省としては、当初から同一地区に設置する以上は、共通施設の管理、共通事務の処理等を含め各研究所間の有機的連携が必要と考えていましたが、予算折衝過程で総合研究所の構想が出てきたので、これについて具体的に検討することとなったものであります。

昭和50年度における総合研究所の調査においては、いくつかの案が出されましたが、三研究所が沿革的にも、それぞれ単独の研究所として構想されてきたものであり、その独自性の確保の点から活発な討議が繰り返され、その結果、同じ岡崎地区に設置される以上、それぞれの独自性を保持しつつ、三研究宿の密接な協力と連帯が必要不可欠であり、そのためには「ゆるやかな結合」を目標として構想を進めるべきであるとの考え方がまとまりました。

このような様々の調査、検討の結果を踏まえ、昭和52年度に生物科学総合研究機構として、基礎生物学研究所と生理学研究所が設置され、昭和56年度には、分子科学研究所を含めた岡崎国立共同研究機構として、現在の体制に再編成され、今に至ったのであります。

私は、昭和52年2月からは学術課長、昭和54年6月からは大臣官房会計課長、さらには、昭和57年7月から審議官、昭和60年7月から学術国際局長として、岡崎国立共同研究機構にかかわる仕事に携わってまいりました。

創設後、基礎生物学研究所は、13研究部門を持ち、最先端の研究設備を備えた共同利用の研究所として、その重要な役割を果たしてきております。

10周年を期に、我が国の基礎生物学研究の中核的研究機関として、また国際的な研究拠点として今後一層の発展を心から期待しております。